

プロフィール

福岡県出身。学部時代はヨーロッパ政治を勉強し、卒業後、アメリカの大学院で紛争学を専攻。主に、元子ども兵の社会復帰につき研究を行う。大学院卒業後、外務省国際協力局国別課、在ルワンダ日本大使館、対パレスチナ日本政府代表事務所、パレスチナ地方自治省（JICA 専門家）にて日本の ODA 事業に従事。平和構築・開発におけるグローバル人材育成事業に参加し、UNICEF ヨルダン事務所に派遣され、青少年育成活動を担当。研修後も、引き続き同事務所で勤務中。

1. 平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

物心がついたころから戦争に興味がありました。私が通っていた地元の小・中学校は、平和教育に熱心で、毎年6月には沖縄について、8月6日は夏休み中でも登校日に指定されており広島・長崎の原爆や世界大戦について学ぶ機会がありました。その頃から「なんて戦争は悲惨で残酷なんだ」と思うと同時に、自分は戦争のない時代に生まれて本当に良かったと思っていました。しかしながら、世界に目を向けてみると、湾岸戦争、ユーゴスラビア紛争、ルワンダでの虐殺、パレスチナ占領、イラク戦争など自分が生きている時代に戦争が起きているという事実に対し、なんで戦争は起きるのだろうかという疑問がわき始め、また世界平和のために何かをしたいと思うようになりました。そして、ちょうど私が高校生の頃、UNHCR のトップとして活躍されていた緒方貞子さんが盛んにメディアで取り上げられるようになり、日本人として国際平和に貢献されている人がいることを知り、国際機関で働いて平和構築に貢献することを将来のキャリアとして意識するようになりました。

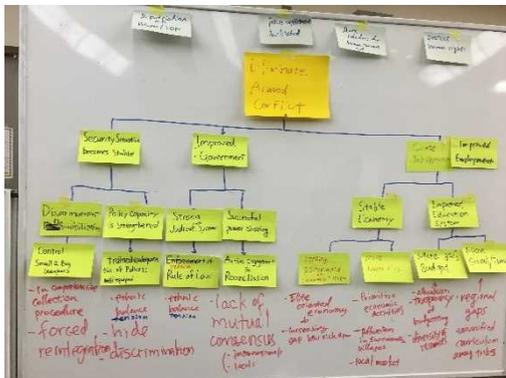
その後、大学院で紛争学を学び、国際協力の現場で働くようになったのですが、数年経った時に、最前のアカデミックの議論をインプットして自分が今まで現場で経験してきたことをレビューしてみたいと思うようになりました。また、その頃、国際機関でのキャリアを真剣に検討し出したものの、国際機関での経験と言えばインターンシップくらいしかなかったため、国際機関に入るきっかけを探していたことと、また、キャリア形成について具体的に相談できる人を必要としていたため、自分が欲していることをすべてカバーしてくれる本事業に応募をしました。本事業のことはこの業界の日本人の間ではよく知られていましたし、修了生の方と一緒に仕事をすることもあり、どういう事業なのかというのは知っており関心を持っていました。

2. 国内研修に参加した感想は？

国内研修は、大変充実した内容で期待以上のものでした。まず第一に、人道・開発支援の front line で活躍されている、または活躍されていた講師陣との交流です。講師の方々は、1週間ごとに入れ替わり、ただ講義をされるのではなく、研修員の私たちと一緒にグループ・ワークに参加され、アドバイスを下さったり、議論の手助けをしてくださいます。フィールド

や本部では今現在どのようなことが議論されているのか等最新の情報に触れられたのは新鮮でしたし、自分の意見や疑問を率直に投げかけ議論できたのも大変貴重でした。また、自分が今までお会いすることのなかった分野の方々とも知り合いになれ、キャリア形成の視点が増えました。講師陣の方は皆さんとても気さくで、研修員が国内研修だけでなく今後のキャリアにおいても成長・活躍できるようサポートしてくれようとしている感じがすごく伝わってきました。

国内研修の多くは、実践を想定したグループ・ワークが多く、研修員がそれぞれ持つ専門性や経験を活かしながら意見を持ち寄り、そしてまとめ上げ、1つ1つのアクティビティーに本当に一生懸命でした。これらを通じて、コミュニケーション能力、コーディネーション能力、プレゼン能力なども徐々に磨かれていったのを感じました。約5週間に及ぶ国内研修は、日中は研修に集中し、夜は講師陣や他の研修員との親睦会などに参加するため体力勝負でしたが、1日1日が本当に充実していました。



(左) 実践を想定したアクティビティーは、現場に出てから役立つことが多い。

(右) 国内研修修了式で同期研修員と。達成感に溢れている。

3. 海外実務研修での活動について教えてください。

2018年5月より、UNICEF ヨルダン事務所の青少年育成セクションに派遣され、ヨルダンの若者の社会参加促進支援プログラムを担当しました。一般的に、UNICEFの国事務所ですと、青少年支援は教育セクションや子どもの保護セクションの中で扱われることが多いのですが、ヨルダンは青少年支援プログラムがセクションとして独立している数少ないオフィスの1つです。というのも、ヨルダンは、人口に占める30歳以下の割合が約63%と非常に高く、若者への支援・投資が喫緊の課題とされているからです。この背景には1990年代に乳幼児死亡率が劇的に改善された一方で、ひと世帯当たりの子どもの数は減っておらず、1990年代以降に生まれた子供たちは現在20代、ベビーブーム世代と言え、この傾向はあと数十年続くと予想されています。

ヨルダンの若者を取り巻く状況としては、高等教育への進学率は決して悪くないものの、若者が身に付けているスキルと労働市場で必要とされるスキルに大きなギャップがあり、キャリアカウンセリングなどの支援もほとんどなく、医者やエンジニアになることが社会的に評価されているため多くの若者がこれらの分野を大学で勉強し、就職を希望するので、労働市場のニーズと若者の選択肢のバランスが著しく不均衡である等の問題があります。また、女

性の大学進学率は、男性よりも高いものの、就職となると女性の労働市場参加率はイエメン、シリアに続き世界で3番目に低く、大学を卒業した女性が何もせずに何年も家で過ごしているという話はよく聞きます。これらの問題に加え、若者の社会とのつながりが薄く、社会から孤立し、若者の声が彼らに影響する政策や決定などに反映されていないことも問題視されています。

このような状況に対して、通常 UNICEF のマネートとしては、0歳から18歳までの子ども・青少年が支援の対象になるのですが、ヨルダンにおいてはその対象を24歳まで拡大し、子どもから大人への成長、そして起業を含め就職できるよう包括的な支援を行っています。その中で、私が担当しているのはボランティア事業で、ボランティアを通じて、若者に社会で必要とされるスキルを磨かせ、また、社会とのつながりを提供することを目的としています。具体的な仕事内容としましては、若者がボランティア登録をし、民間企業や市民団体、NGO、公的機関等のパートナーがボランティア募集をできるウェブサイトを立てるところから出発し、その際、若者にとって役に立つ情報やボランティアを受け入れる側のパートナーへの注意事項やアドバイスなどのコンテンツをドラフトしたりしました。また、若者のボランティア登録数は伸びる一方で、ボランティアの数がなかなか増えなかったため、ボランティアに関心のありそうな企業や団体へのアウトリーチ・キャンペーンを行うためにオペレーション・センターを期間限定で立ち上げ、その運営・管理を任されていました。今年に入ってから公的機関でのボランティア活動を促進するため、ヨルダンに約200ほどあるユース・センターがボランティア活動を提供し若者の社会参加を促進するシステムを確立できるよう、能力強化支援を担当しています。



(左) オペレーション・センターでボランティアをしてくれた若者たち

(右) 若者のニーズ調査のため、ユース・クラブとの意見交換会

4. 海外実務研修での感想は？一番印象に残っていることは？

UNV として派遣されて最初の頃は、国際機関で働く“洗礼”を受けたことを覚えています。IDの受け取り、オフィスへのアクセスキーの貸与、机の確保等当たり前にもらえると思っていたものが思うように受け取れず、何度も関係部署に足を運び、自分で交渉して獲得しないとイケない状況でした。UNICEF ヨルダン事務所に限らず国際機関ではよくある話ということの後からいろんな人から聞き、今では些細なことに思えますが、当時は本当に戸惑いました。また、私が着任した際に、私を指導することになっていた上司の異動が決まっており、

その上司が有給消化などによりほとんど出勤しなかったため、読み物だけ与えられて放置され、モチベーション高く赴任したにも関わらず、自分は何のために本コースに参加してUNVとして派遣されたのだろうと悶々とする日々が続きました。このままでは、自分は何もせず、そして学ばず海外実務研修が終わってしまうのではないかという不安に陥りました。しかしながら、周りに相談しながら、自分の部署の仕事で手が行き届いていない部分や改善できる部分等自分が出来ることを探し、与えられる仕事だけでなく積極的に自分から働くようになり、そうすると、徐々に仕事の量が増えていき、上司や同僚からの信頼が高まってきていることを実感するようになり、毎日やること考えることが増え、仕事の充実度が高まっていきました。今振り返ると、赴任当初は、指導してもらいたいとか、仕事を教えてもらいたい等職場に対する期待が高い一方で、国際機関で働き方を十分に心得ていなかったのだと思います。その後、紆余曲折しながらも、限られた指導の中で、自分で考え、アイデアを提案し、積極的に周りとのコミュニケーションをとりながら、行動していくスキルや姿勢が求められていることに気づきました。

また、これまで一番印象に残っていることは、プログラムで支援した若者の成長を目撃できたことです。ボランティアに参加する前は、すごく大人しく、自分に自信がない感じが初対面で伝わってくる男の子がいました。彼は、家が経済的に決して裕福ではなく、タウジーヒ（全国统一高校卒業試験、この試験結果によって行ける大学や選べる学部が決まります）に失敗し、周りとのコンタクトを取るのを止め、その後ニート状態が続き、ボランティアに参加する前は家でゲームをする日々を送っていました。家族からのアドバイスもあり、ボランティアに登録し、2か月間ほぼ毎日、UNICEFが実施するアウトリーチ・キャンペーンのボランティアに参加し、民間企業に営業する手伝いをしてくれました。ボランティアが終わるころには、ボランティアを通じて知り合った同世代の友達も増え、性格も前向きになり、就職活動に励むようになりました。ボランティアが終了して数か月後、彼から就職が決まったとの連絡がありました。ボランティアを通じ、自分が持っているスキルや自分自身に自信を持てるようになり、また、社会とつながることに積極的になり、結果として就業できたことは彼の努力によるところが大きいですが、プログラムを通じて彼にきっかけを与えることができ、彼が大きく成長していく姿を目撃できたことを大変嬉しく思いました。



ボランティアに参加してくれた若者たちへの修了証書授与式にて

5. 今後のキャリア・プランを教えてください。

海外実務研修終了後の国連ボランティアとしての契約延長が決まり、引き続き UNICEF ヨルダン事務所で青少年育成支援に従事する予定でいます。ボランティア事業もようやく軌道に乗れ始め、これからもっと多くの若者たち、とくに社会的に厳しい環境に置かれている若者にサービスを提供できるようになりたいと思いますし、ユースセンターへの能力向上支援もまだまだ必要とされているので、もうしばらくこのプログラムで頑張りたいと思っています。また、今後は紛争中や戦後復興中の国・地域での、青少年育成支援に関わっていきたいと考えています。

6. 事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。

これから国際機関で働いてみたいと思う人には、ぜひ応募して欲しいと思います。国際機関で働き始めるといろいろな壁にぶつかることがあります。そんな時に、国内研修で一緒に切磋琢磨した同期研修員の存在や講師陣とのつながりはとても心強いです。また、キャリア形成に関しても、経験豊かなアドバイザーの先生に気軽に連絡を取れることも本事業の大きなメリットです。本事業に参加する目的やタイミングは人それぞれ異なると思いますが、本事業に参加することで、この業界で働くことがもっと楽しく充実したものになると思います。